戦乱と旱魃のなかで用水路を拓く

ペシャワール会事務局長
福元満治

1948年鹿児島市生まれ。ペシャワール会事務局長。図書出版石風社代表。西南学院大学、長崎シーボルト大学非常勤講師。著書に「伏流の思考 私のアフガンノート」、「石牟礼道子の世界」(共著)、「地域と出版」(共著)、近刊に「出版屋の考え休むににたり」「岩になった鯨」(絵本 絵・黒田 征太郎)など。福岡市在住。

アフガニスタン国内事業概念図

1　なぜ、医者が土木工事をするのか

ある国立大学の医学部でのことである。講演後の質疑応答の時間にひとりの学生が質問した。

「中村先生は医者でしょう。なぜ医者をせずに土木工事をやっているんですか?」私は内心、「この医学生、私の話の何を聞いていたのか」と思いつつ、次のように答えた。

「先ほど話したように、私たちは、多い時には10カ所の診療所を運営していました。ところがそこに大旱魃が起こり、診療所のある村から村人がいなくなったのです。みな食えないので、難民となって出て行きました。旱魃によっておこる飢饉には、医療や薬だけでは対応できません。中村哲医師は村で井戸を掘り始め、それでも間に合わないので、農業用水路の建設を始めたのです。診療所があって医者がいても、薬では渇きと飢えを治すことができなかったからです。」

私たちペシャワール会(NGO　本部福岡市　1983年結成会員15000人)は、中村哲医師を現地代表として、1984年からパキスタン・ペシャワールで活動を開始した。柱にしたのはハンセン病の診療だが、アフガン難民やアフガニスタン山岳部での僻地診療など、10カ所の診療所を運営してきた。28年間の延べ診療数は、200万人を下らない。

アフガニスタンは、2001年以来現在まで米軍やISAF(国際治安支援部隊=NATO軍)の空爆下にある。遡れば1979年から1989年までは、ソビエト軍侵攻によるアフガン戦争があり、死者200万人と600万人の難民を出している。この地では、イスラム諸党派による内戦を含めると30年以上にわたって戦乱が続いていることになる。

西側のメディアを見るかぎり、アフガニスタンは荒廃した砂漠と山の国で、狂信的で排他的な髭面のテロリストが、爆弾を抱えて横行している、というイメージがある。ところがこの一見「不毛」に見える地が、2000年に大旱魃が起こるまでは、穀物自給率が90パーセントを超える農業国だったのである。人口比率をみても、人口約2000万人の内の8割が農民で1割が遊牧民、工業らしい工業はない。つまりタリバンや軍閥などの武装民もそのベースは農民なのである(2001年に起きた米国での9. 11事件の実行犯には、一人のアフガン人もいなかった。19人全員が大学出のアラブ青年だった)。

国連機から見た
アフガニスタンの山々

アフガニスタンは、確かに乾燥地帯にある山の国であるが、その高い穀物自給率を支えたのは、国土の8割を占める高山の雪である。冬場はある程度の雨(山では雪)が降れば小麦が実る、天水農業が可能である。春から夏にかけては、山に降った雪や万年雪が雪解け水となって河川の流域を潤す、灌漑農業である。アフガニスタンで広く知られた、次のような諺がある。

「アフガニスタンでは、金はなくとも生きてゆけるが、雪がなければ生きてゆけない」

2000年に大旱魃が起こるまで、私たちもこの諺の切実さを理解できていなかった。積雪量が減りつつあるなかで「異常気象」が進行していたのである。自給自足に近い村を、春に雪解け水が洪水となって襲い、あとは渇水となる。旱魃の中での洪水や鉄砲水、それは人間にとっては異常気象であるが、大地にとっては自然現象に過ぎない。そして自然は、恵みと災いを併せて人間にもたらす。

2000年夏、私たちの診療所で異変が起きた時も、すぐには事態を理解できなかった。診療所に栄養失調の子供が下痢で次々と運び込まれてくるのだが、その背景に、井戸が涸れ生活水が不足し、子どもたちが川床の泥水を飲むようなことが起こっているとは、分からなかったのである。

中村医師は、「とにかく生きていてくれ、病気は後で治すから」と、診療所の近辺に井戸を掘り始めた。調べてみると、WHO(世界保健機関)が、旱魃について警告を発していた。中国の西からイラン、イラクまで大旱魃が発生し7000万人が被災しているという。その中でもひどいのはアフガニスタンで、人口2000万人の内1200万人が被災し、400万人が飢餓線上にある。このまま放置すれば100万人が餓死するというものだった。

しかし「国際社会」はこの警告に何の反応も示さなかった。唯一世界が注目したのは、「旱魃と国連安保理の制裁」によって追いつめられたタリバン政権の一部急進派が、バーミアンの石仏を破壊した時だけだった。「人類の共通遺産に対する何たる暴挙!」という大合唱が起こり、そしてそれもすぐに止んだ。9. 11事件が起こるのは、その翌年のことである。

2　清潔な水が病気予防

WHOが「このまま放置すれば、100万人が餓死する」と警告したのである。本格的な国際支援が始まれば、医療活動に専念できると考えたが、国際社会はテロ以外には何の関心も示さなかった。国際支援を期待できないと思い定めた私たちは、旱魃対策として本格的に井戸を掘り始めた。

それまで医療活動しかしたことのないNGOである。初めはボーリング業者に依頼して掘削することを考えた。しかしボーリングは費用がかかるだけでなく、井戸の水位が下がった時に貧しい農民たちの手に負えなくなる。伝統的な手掘りの井戸であれば、作業日当(1日240円)も入り、私たち外国人が去っても道具さえ残せば、自分たちでメンテナンスできる。いわば自立のためのローテック技術である。2003年までに、アフガニスタン東部で掘った井戸の数は1600本、さらに飲料用井戸だけではなく、径5メートルの灌漑用井戸を掘削し、カレーズ(伝統的地下水路=横井戸)も30カ所以上修復した。

飲料水確保のための井戸によって、子供たちの腸管感染症や皮膚病は減少した。一般に国際的な支援組織は、感染症対策として抗生物質を配付する。ところが清潔な水がなければ、

いくら薬をばらまいても感染症をコントロールすることはできない。私も掘削した井戸や修復したカレーズの水を飲んだ。しかし下痢をしなかったのである。パキスタンやアフガニスタンで、生水を飲まないというのは鉄則である。私のようなやわな日本人が飲んでも下痢をしないということは、かなり清潔な水ということである。水で病気を治すことはできないけれど、清潔な水が感染の悪循環を断ち、病気の予防にはなるのである。

3　100の診療所より1本の用水路を!

私たちは、1600本の井戸を掘ったが、井戸はあくまでも飲料水確保がメインの目的である。飲料水がなければ生きていけないが、それだけでは人は生きてゆけない。ましてアフガニスタンの8割は農民である。

戦乱と旱魃の中で国土を復興するためには、農業用水が必要である。中村医師は「100の診療所より1本の用水路を!」と2003年3月19日（翌日からブッシュ政権によるイラク侵攻が始まった）、農業用水路の建設に着手したのである。

蛇籠を積む作業員（2003年）

農業用水路となれば大掛かりな土木工事である。医療チームにとって無謀とも思える用水路事業は、中村医師自身が設計図を描き、自らユンボなど重機を運転して進められたが、その治水技術は日本の伝統工法を参考とした。

アフガニスタンの大河クナールは、暴れ川である。この数年洪水と氾濫に見舞われている。用水路は決壊するものである。コンクリートと鉄筋の近代工法だと土地の人々にとってその修復は、技術的・財政的にみて不可能である。実際、国際援助団体によって建設された用水路や橋が、決壊後そのまま放置された現場を、いくつも見てきている。

そこで私たちが主に採用したのは、江戸時代に完成した「蛇籠（じゃかご）工」と「柳枝（りゅうし）工」による護岸である。これは鉄線で編んだ1m×2m×80㎝ほどの鉄線の籠の中に石を積み重ねたものである。これを用水路の両岸に積み上げ、その上に土嚢を積んで柳を挿す。柳の根は水を求めて石の間にネット状に入り込み絡み付く。蛇籠の針金が切れる頃には、柳の根がびっしり石を包み込む。骨董的工法だが、環境問題や生物多様性が取りざたされる現状では、「最前線」の工法ともいえる。アフガン人は家を石と泥と日干しレンガで築く。だから男たちは石積みの技術を、子供の時から身につけている。彼らにとって蛇籠であればその修復・保全は難しいことではない。渇水期、増水期に関わらず、安定的に取水するための斜め堰も、江戸時代に作られた筑後川（福岡県朝倉市）の山田堰を、中村医師が現地踏査のうえモデルにした。取水門は堰板方式で、排水門はスライド方式である。他に石出し水制に霞堤、沈砂池など、さまざまな伝統工法を駆使している。ベースは伝統工法であるが、水門、サイフォン、暗渠等には、鉄筋とコンクリートを使用している。植樹した樹木は、柳、桑、ユーカリ、オリーブに防風林、防砂林のガズ（乾燥に強い樹木）など60万本を越えた。

通水直後のガンベリ砂漠（2009年8月）

通水後農地になったガンベリ砂漠（2012年4月）
右側の林は、ガズの木による防風（砂）林

4　異文化の尊重

完工したマルワリード用水路は主幹水路だけで25.5km、張り巡らされた給水路、排水路を入れると100kmにもなる。用水路によって復興した田畑は3000haおよそ15万人の暮らしが成り立つ。

蛇籠での護岸と柳（2007年）

工事には連日500人ほどの作業員が従事したので、7年間で70万人以上の雇用を確保したことにもなる。用水路工事が無ければ難民になるか、軍閥や米軍の傭兵になるしかなかった農民である。砂漠化した荒れ地が緑の耕作地に蘇ると、戦乱で荒れた人々の心も潤いを取り戻す。あちこちに小さな学校もでき、水浴びする子供たちの歓声も響くようになる。用水路工事が土地と人の生命力を復活させ、治安安定をもたらしたのである。総工費は約12億円、ペシャワール会会員の会費と支援者の寄付による。

さらに用水路の最終地点であるガンベリ砂漠に200haの試験農場を開墾した。スイカ、ピーナツ、綿花などを栽培し、稲作も行った。現在は柑橘類やザクロなど果樹にも力を入れている。ここでは「自立定着村」の構想も準備されている。用水路の建設現場で治水技術を習得した作業員＝農民の家族が入植し、農業をやりつつ用水路の修復・保全を行うことが期待されている。

さらにイスラム教徒である農民たちの精神的拠り所であるモスクとマドラサ（伝統的学校）も建設した。これで、生存の確保（農地）と保全システム（自立定着村）と精神的拠り所（モスク・マドラサ）の基礎ができたと考えている。

2010年からは、JICA（日本海外協力機構）との共同事業も始まり、現在私たちの用水路事業で1万6500haの農地の灌漑を維持し、65万人の生存が保たれている。これは2000年から始められた事業の成果とも言える。しかし中村医師は次のように言う。「用水路工事そのものも大変であるが、それらの維持管理はさらに大変である。そしてそれ以上に大変なことは、そこで暮らす農民たちの宥和である」と。

私たち日本人を含めた先進国の人間は、いわゆる途上国に対して、無意識のうちに優越感を持っている。経済的優位性はもちろんだが、近代教育の導入、女性の地位向上、民主主義制度など、先進国が青写真を描いて与えるべきものだと考えている。保守的伝統社会がそれに抵抗すれば、軍事行動も辞さない。

アフガニスタンはイスラム文化を精神的支柱とする伝統的農業国である。平時であれば、外国人にも寛容な人々である。30年近いパキスタン・アフガニスタンでの活動で私たちが学んだのは、その土地に適した技術の運用の前に、相手の文化を理解、尊重するということの重要さである。それがなければ、たとえ善意であっても、それが受け入れられることもないし、まして根付くことはないということである。

マルワリード用水路の取水門。中村医師（中央）と福元（右）